地球環境を守ることは、未来を守ること。今、私たちに何ができるのか。暮らしの中の身近な取り組みから、生産と消費の現場における新たなチャレンジ、国際的な動向まで、環境をめぐる最前線の動きを連載で紹介する。

連合「労働組合のエコ活動PRアワード2018」連合事務局長賞

情報労連「全国環境一斉行動」社会から共感される運動として

相原事務局長より表彰盾を贈呈

今年から始まった「労働組合のエコ活動PRアワード」は、環境に関する取り組みをどうPRし、取り組みがどう広がったかを募集している。記念すべき第1回の連合事務局長賞を受賞したのは、情報労連の「全国環境一斉行動」。毎年5月を中心に、全国で環境保護を中心とする社会貢献活動に取り組んでいる。その経緯や狙い、活動内容や運動の広がりについて増本高大前中央執行委員に聞いた。

増本高大
ますもと・たかひろ
情報労連
前中央執行委員

一人ひとりが行動しよう！

―「全国環境一斉行動」を始めた経緯や狙いは？

情報労連では、2006年に「21世紀デザイン―『暮らしやすい社会』をめざす情報労連の政策と新たな行動」という長期方針を策定した。めざすのは、「自立・自律」「協力・協働」に基づく暮らしやすい社会。その実現に向けて、「総合労働政策」「社会保障政策」「情報福祉政策」の3つの政策に取り組むとともに「組織の内外の人と連携・協働して、社会から共感される運動」を提起した。情報労連として、組合員が「市民」として行う活動を支援して活動のすそ野を広げていくとともに、組合員のみなさんには、「一人ひとりが自覚して、できることから行動しよう！」と呼びかけた。これを受けて、環境保護活動、社会貢献活動、カンパ活動、平和運動などを「明日Earth（あすアース）」と総称することになった。「全国環境一斉行動」も「明日Earth」の取り組みの一つとして2009年にスタートした。

当時の資料をみると、すでに各地で清掃や森林保護など市民団体と協働した活動が行われていた。そのバラバラに行われていた活動を、毎年一定の期間に「全国環境一斉行動」として集約した。もちろん新たに「全国環境一斉行動」として始めた活動もある。

―エコ活動PRアワードの受賞理由として、「全国環境一斉行動」が各地で様々な活動に取り組んでいることや活動の必要性を解説していることなどを挙げています。その内容や特徴は？

活動の主体は、基本的には情報労連の都道府県協議会と単組だが、地域の市民団体や地方連合会のクリーンキャンペーンとタイアップして実施している地域もある。「情報労連・愛の基金」という助成制度を通じた地域の団体とのネットワークもその活動を多彩で充実したものにしてくれている。

内容も多彩で、活動の場は、海、山、川、公園など様々。清掃ボランティア活動に家族と楽しめるバーベキューなどのレクリエーションを組み合わせたり、学習会とセットにしたりと、各地で工夫している。今年の実績を集計しているところだが、全国で50カ所以上、参加者数は約5000人。家族や退職者が多数参加してくれているのも大きな特徴だ。10年をかけて、「組織の内外の人と連携・協働して、社会から共感される運動」として定着していると思う。

組合活動に参加するきっかけに

―組合員の反応は？

私自身も、何度か参加しているが、「参加して良かった」「勉強になった」という声をいただいている。環境保護の重要性はわかっていても、自ら行動するきっかけはなかなかない。だから、「労働組合が呼びかけてくれて良かった」と。

また、環境問題は誰もが参加しやすいテーマだ。加盟組合役員からは、「一般の組合員に労働組合の活動を知ってもらう、良いきっかけになっている」という声が届いている。情報労連には小規模の労組も多く、レクリエーションや社会貢献活動を単独で行うのは難しいが、情報労連の行動に参加することで、活動の幅が広がり、加盟組合同士のつながりも深まっていると聞く。

10年続けているので、春になると、組合員のみなさんが、そろそろ「全国環境一斉行動」の時期だと思ってくれる。本部からの連絡が少し遅れると、「今年はやらないの？」と問い合わせがくるぐらい根付いていて、リピーターも多い。だから、発信については、告知より活動報告を重視し、機関紙やホームページ、SNSで大きく取り上げるよう都道府県協議会や加盟組合にお願いしている。

今年の「全国環境一斉行動」の様子

（HPより抜粋）

―取り組みの「手応え」は？

情報労連が提起する社会貢献活動に対して、組合員のみなさんが共感をもって受け止めてくれていると感じている。それは、もともと組合員のみなさんの感度や意識が高く、こうした活動を展開できる土壌があったからだと思う。

情報労連という産別の活動が見えやすくなったことも大きな「手応え」だ。個々の組合員にとっては、労働組合に加入しているという意識はあっても、産別はやや遠い存在だ。でも、全国一斉行動で「情報労連」という旗の下に集うことで、個々の企業の枠を超えた仲間意識も芽生えてくる。

労働組合があって良かったと思える運動を

―労働組合が環境問題に取り組む意義とは？

労働組合の本来の役割は、会社と向き合って雇用や労働条件を守ることだが、社会とつながり、社会に貢献する活動も大切にすべきであり、特に産別は、そうした活動こそ発信していかなければいけないと考えている。情報労連が産別としてできることは、やはり単組では取り組みにくいテーマやスケールメリットを生かしたテーマへの取り組みであり、まさに「明日Earth」の社会貢献活動だ。

実際に清掃活動をして飲料ボトルのゴミが多いと気づくと、大人も子どももポイ捨てしないようにしようと自らの行動を変える。労働組合ってこんなこともやっているんだと思ってもらえて、行動するきっかけになれば、それは組合員自身のためにもなるし、地域や職場のためにもなると思う。

―今後の展開や課題は？

地域のみなさんに「労働組合があって良かった」と思ってもらえるような活動として長く続けていきたい。実際に「全国環境一斉行動」を続けてきて、地域の人たちの労働組合を見る目が変わり、労働組合の存在に親しみを感じて応援してくれる人が増えている。そのつながりは、今後、地域の様々な活動にも生かすことができると思う。

ナショナルセンター連合は、もっともっと大きなスケールで地域の活動を支援することができると思う。労働組合があって良かったと思える運動をぜひ発信してほしい。

―ありがとうございました。